

~13
3961
6

8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8

門號
卷六
3961

(6)

壹

增補

近漸伊香郡小座の山あり俗ふと云志津嶽と喚做トヨリの岩琵琶湖と向ひ、余吾湖を背ふて只身のみわざと余吾飯浦の二天河の山前峯相遠り、その末城前ある板橋の方よりとの山峰、うねだる景致々唐山なる梁山泊似テ、然て今この冊子あ作詩と彼如よ擬ト、近世寒葉齋矮父、潮水滸傳を著し、近江の某の山なり、梁山泊也セア、塩焼王の故事、小谷、渠竹生嶋長希寺の嶋をさりせざハ皆神仙の灵地なり、さも深山八百里のと廣ひ、御城代をそぞりまがるもの、予も亦此意あ、且貞の強人を縛、烈女を繫、易ト、余勸懲の一端也、那時簾倉少政、あり京師義婦烈女の溥命うさを水滸の一書小摸擬もの、婦人より、怡か、を矣、かのうど、ゆかかやうも附く又續室を第三編の自注と自叙、本代三此也。

文政丁亥年春正月吉日新版曲亭馬琴識

馬琴

ナムナムヒトニモニ

のをかじ わをかひ
青山風の青柳

向不看の
城索

名取川舟とあら
くもあらきよはや
あがらへゆく行
このこちまん



豆力の粉蝶

智計海の
長竹

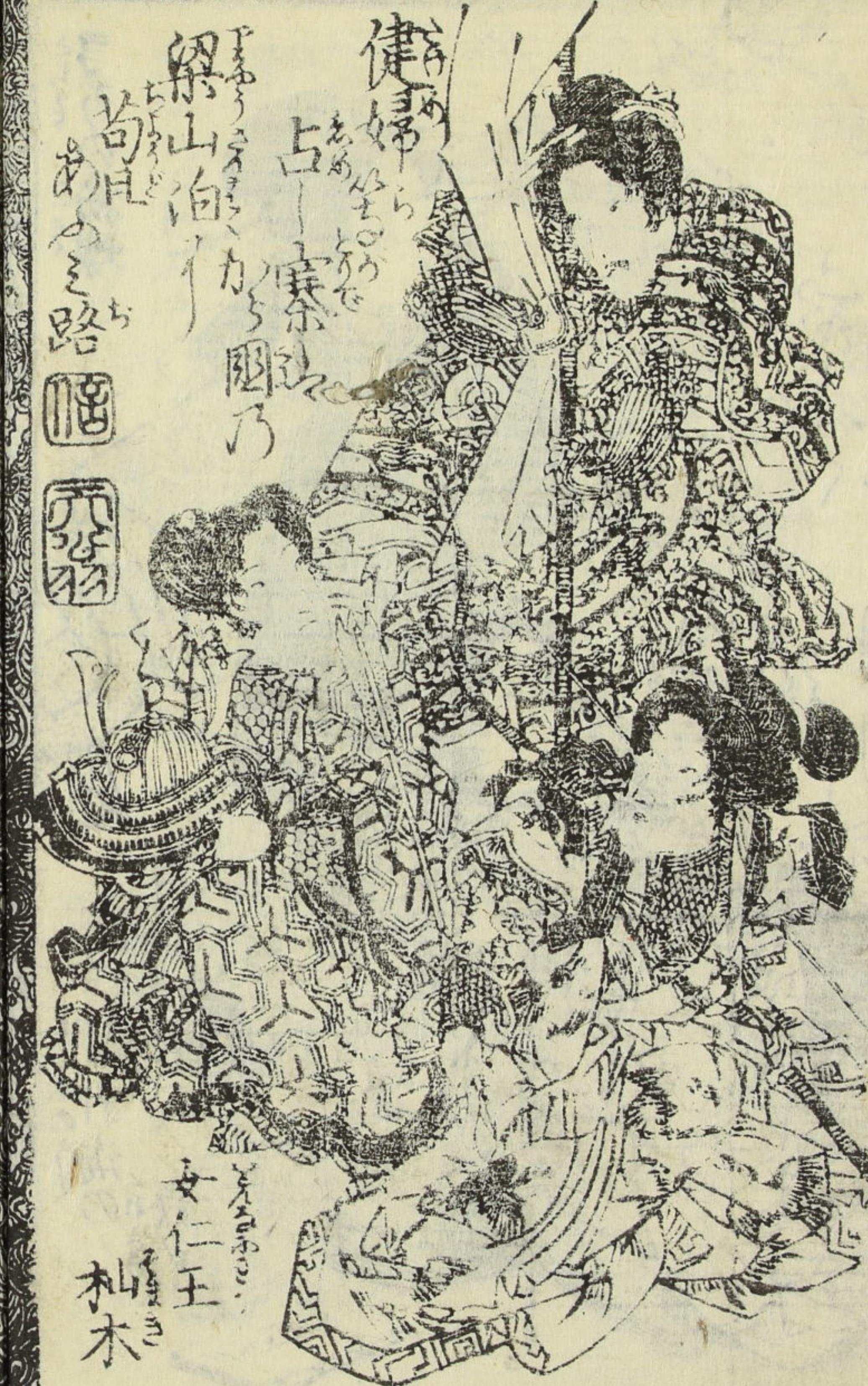


六上
五上
四上
三上
二上
一上



吾妻もよせかやのと
賤博士巨論

天津雁真弓

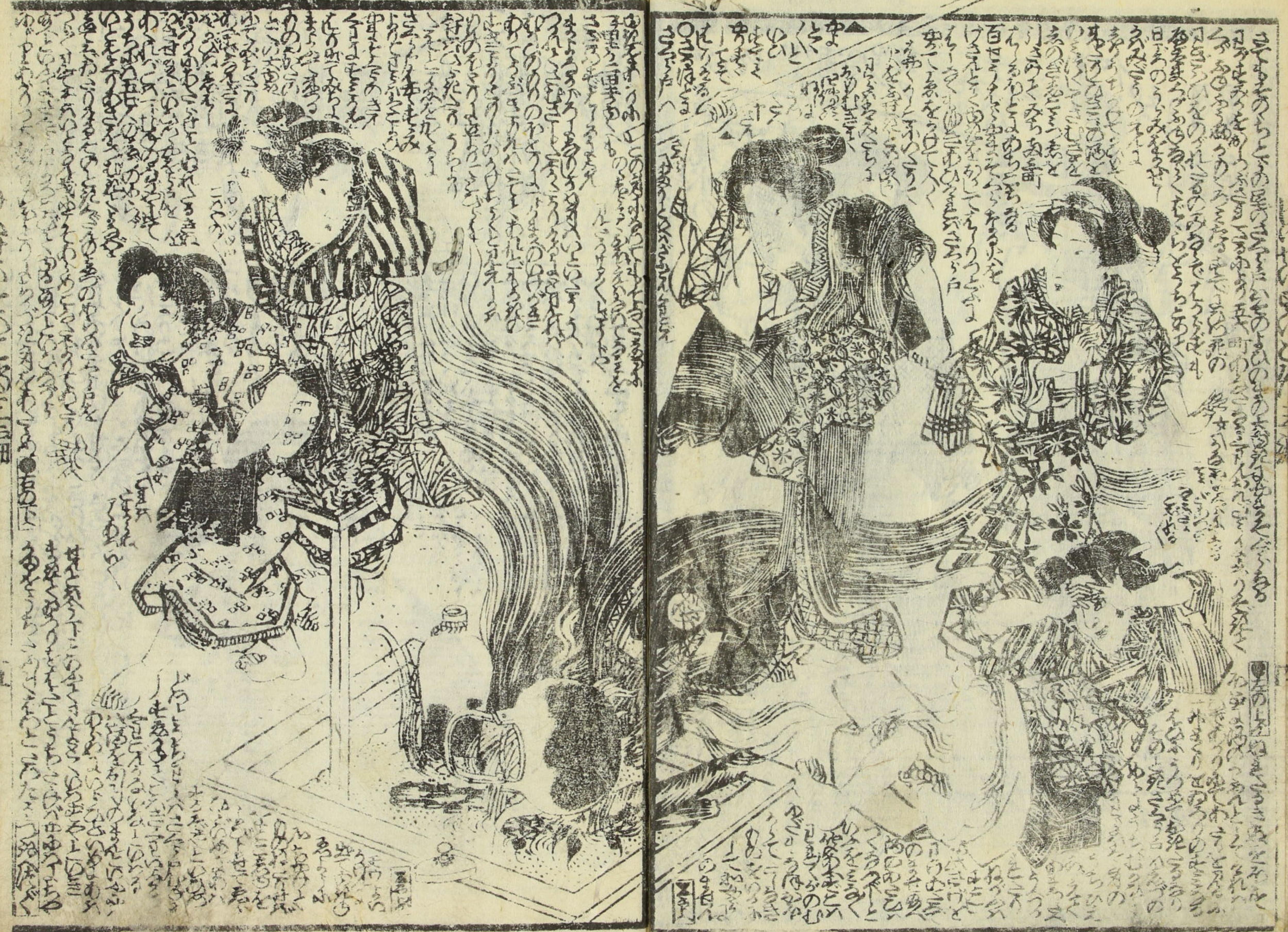


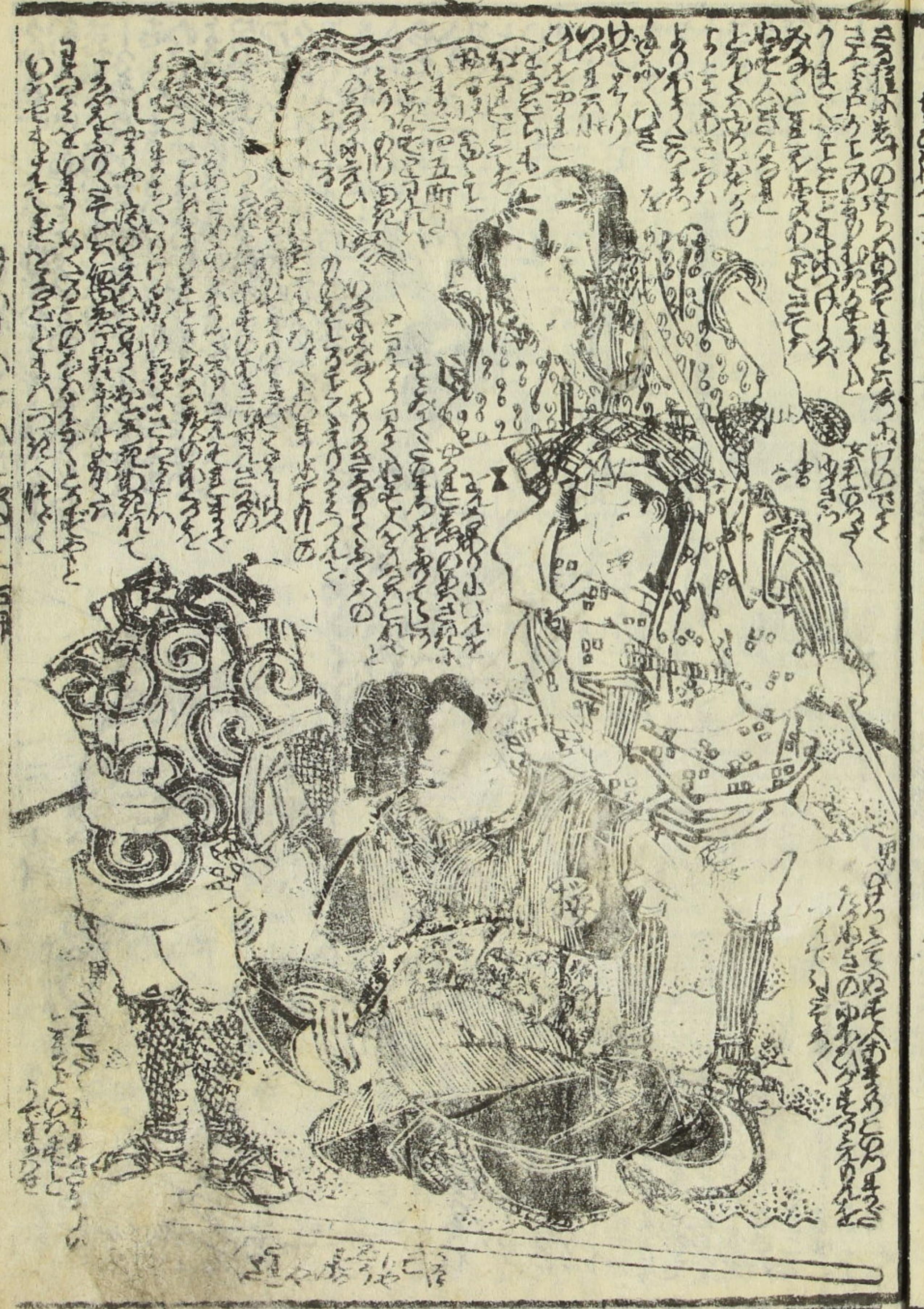
直輩の稻妻

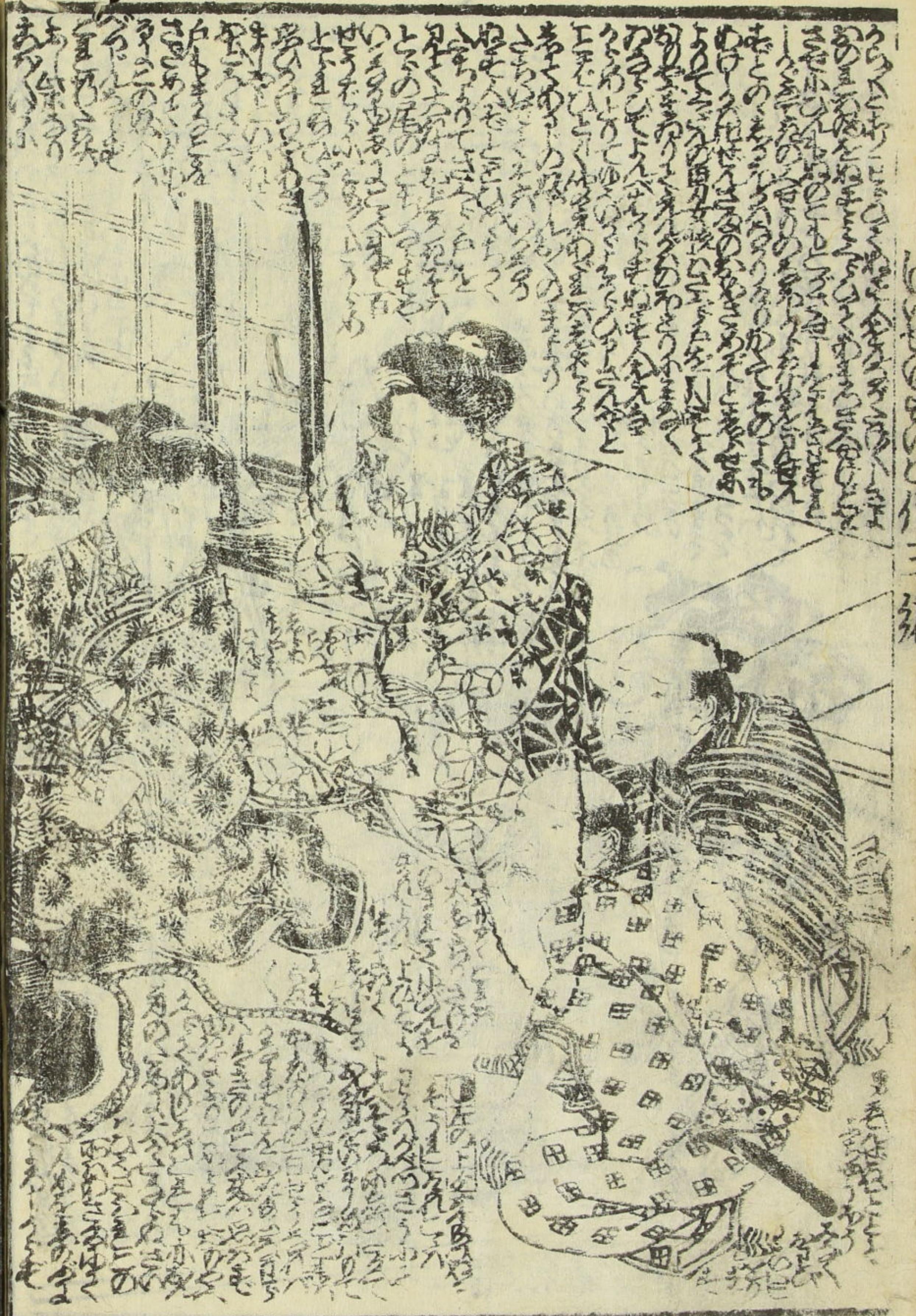
赤頭の
味鳴

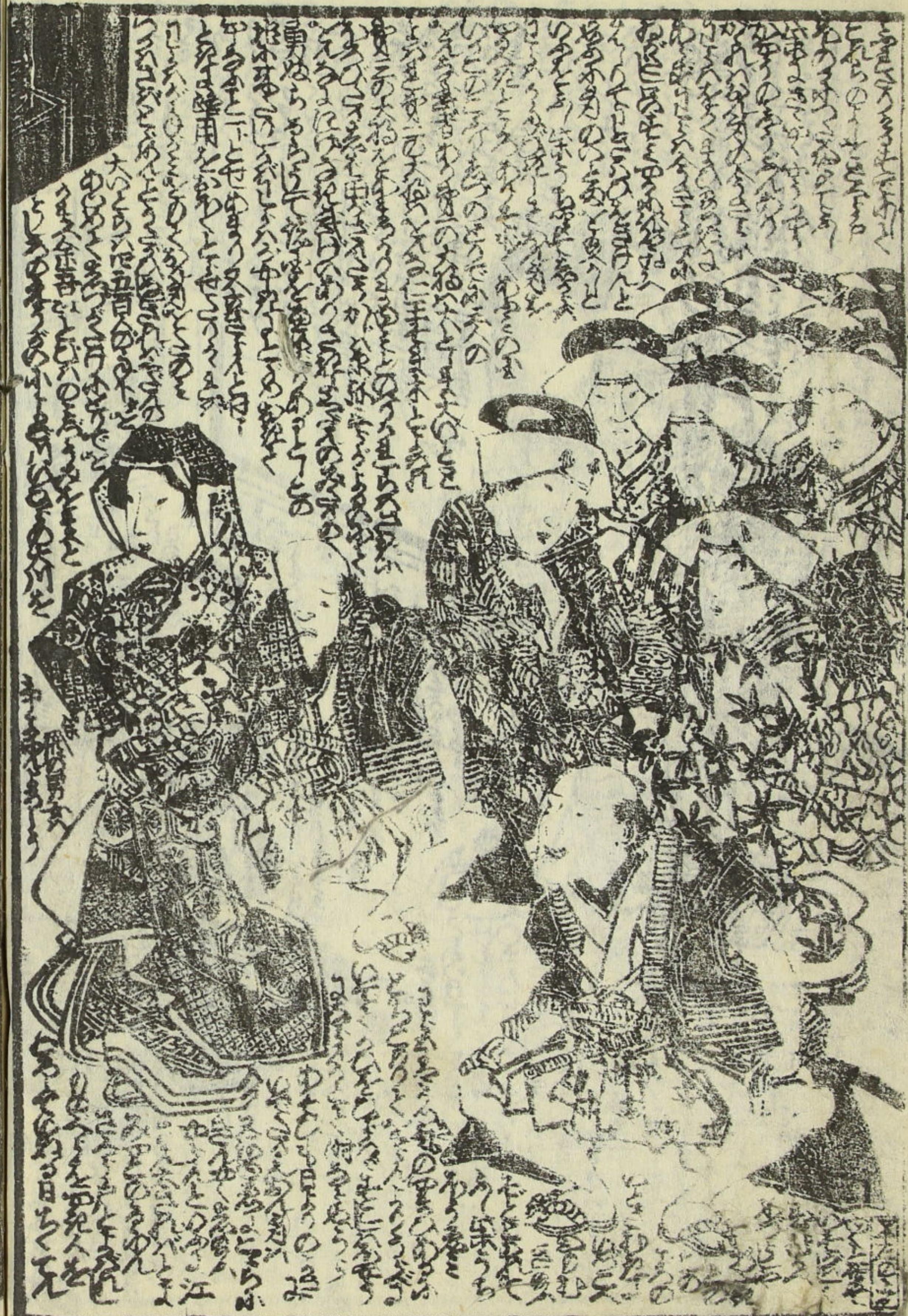


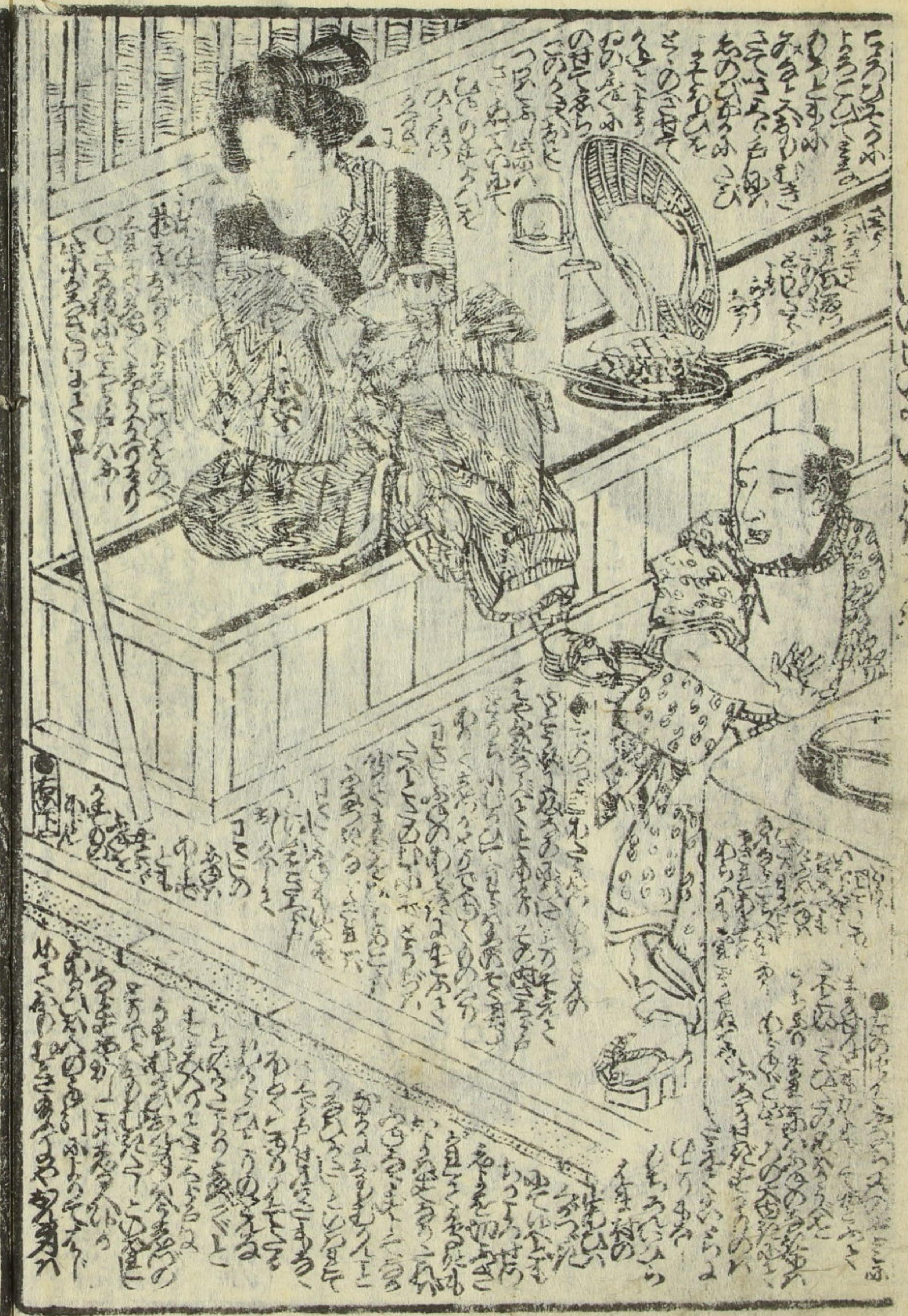
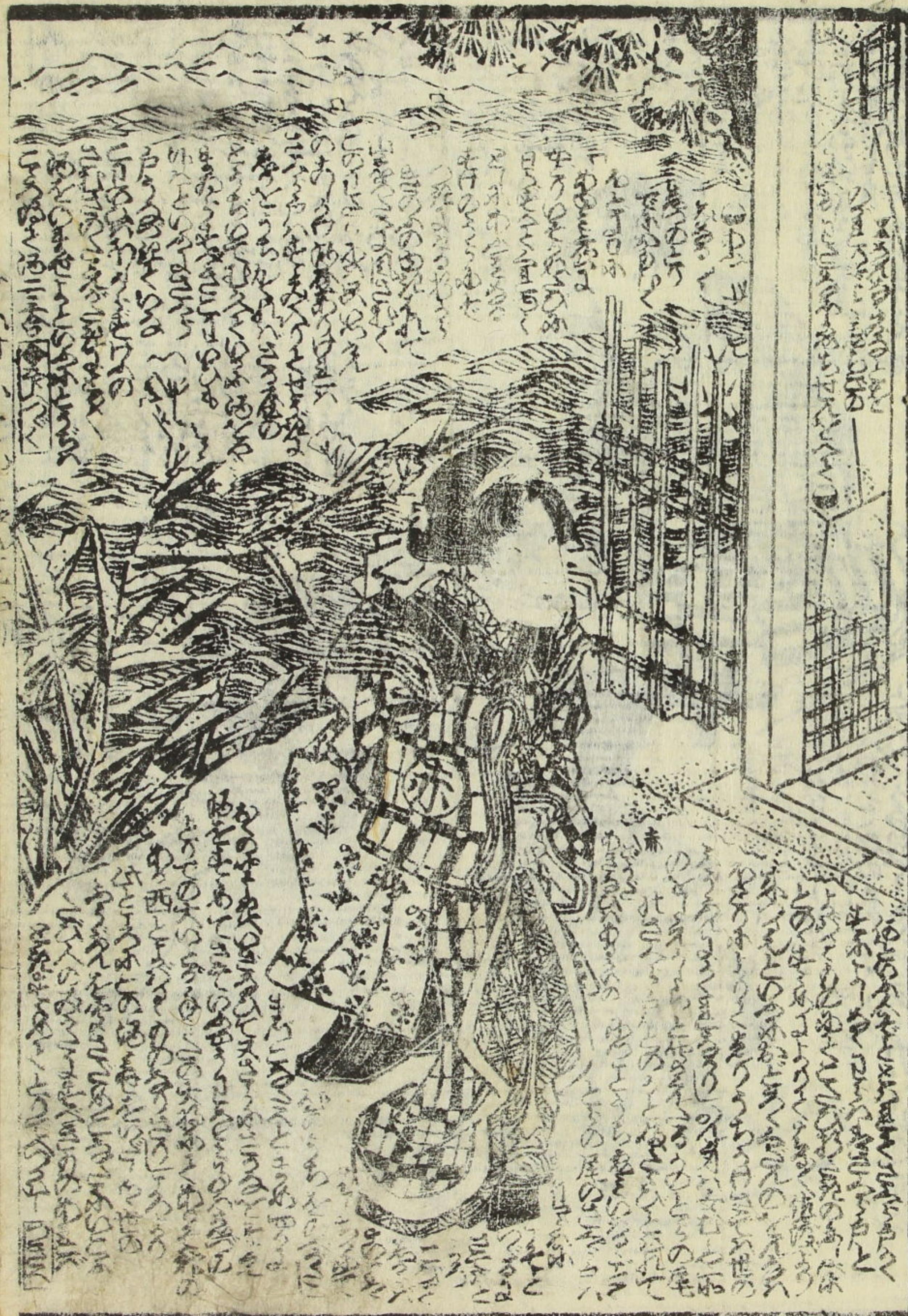


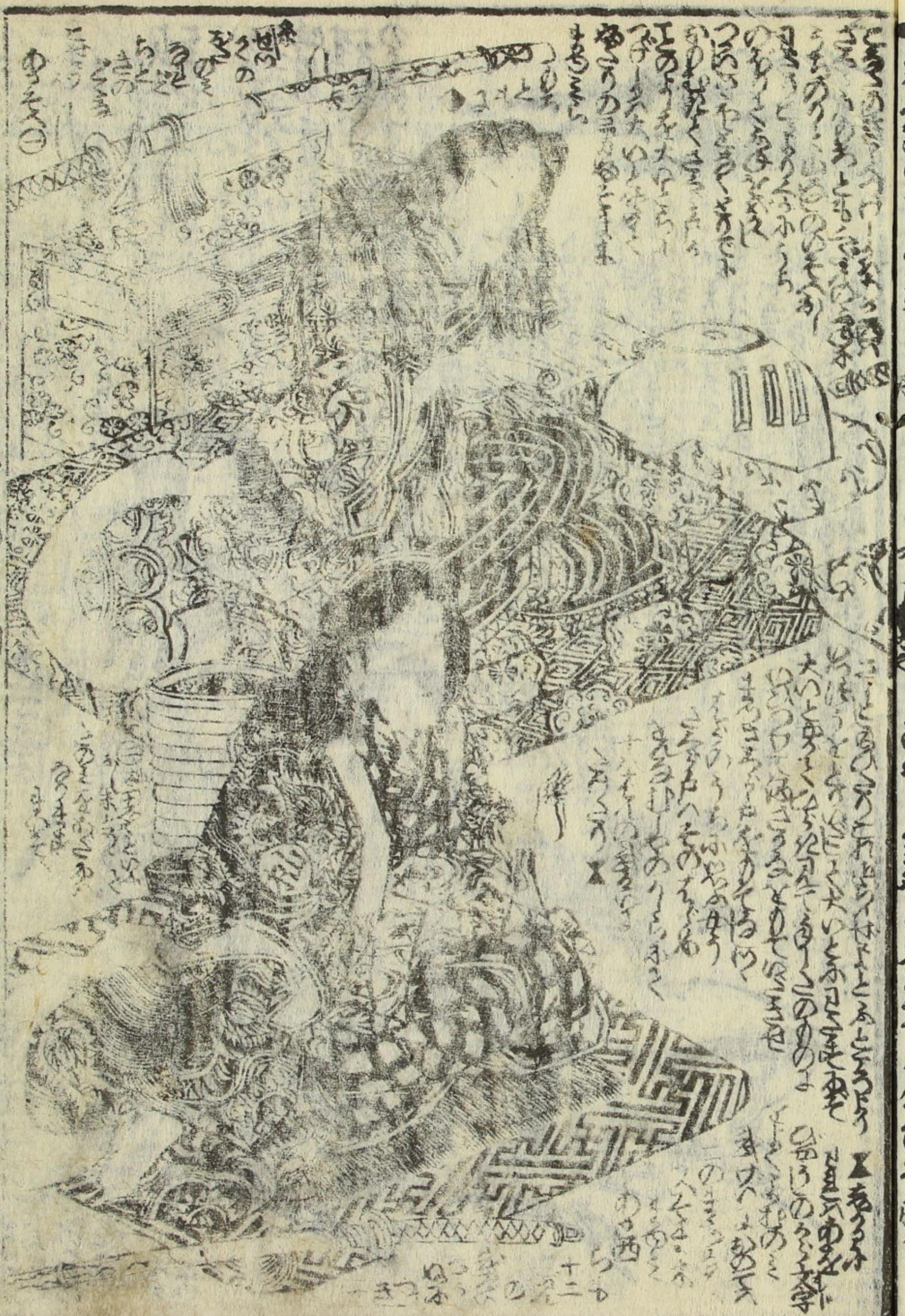












喜屋鷄春孟巳癸四保天回

右衛門坂



藏堂窟仙町油通日書販發春巳桑

三歳上生參全長朝
方
食全冊故
同
禁指
集全冊追
刻
齋
童
遊
言西手本
名鳥勝繪早
中
室

卷之三

馬鹿の事に此の如きを以て甲斐等をもてらるる者
は全開放す。金門の上に國を置く事は未だ有り
追尋を當る。伊勢守道に西慶洋子が、其の妻の
全開追尋の事も亦然である。今之の御子、妻の母
刻製名二百枚の奉への漏れの事あるか。

藏書
廣益齋
塵劫記
卷之二
害

西
大全本あやと通じる事あるともいひ後引をもじしてあるまうと
大全用語と之の訛字とがよくその立ちふれをもくと
前編出来たる、今までの著述からもう多くも集

秦升漢采目
芝居人役者似參早

前北齋爲一革 後編全用五渡畫
古後編全用五渡畫

三箇事後皆無
其言定後者詳

第三全
度又以後之洞名之曰石室并有碑記云
相傳八支氣分屬此州、故號爲石室也。其旁山中
有水注焉、北流與西江合、而南流與東江合、故名之曰

卷之三
即考百篇

年、豈いきぐるに然るの極也。我より事多なる也。
其の如くは、其の如くは、其の如くは、其の如くは、
其の如くは、其の如くは、其の如くは、其の如くは、

